

Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 幼児期における body image の構造に関する研究
-運動能力を中心として-

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2010-01-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中,千恵, 佐久間,春夫, 麻生,武, 藤原,素子, 杉峰,英憲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1264

氏名(本籍)	田中千恵 (兵庫県)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博課第271号
学位授与年月日	平成17年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	幼児期における body image の構造に関する研究 —運動能力を中心として—
論文審査委員	(委員長) 教授 佐久間 春夫 教授 麻生 武 助教授 藤原 素子 教授 杉峰 英憲

論文内容の要旨

適切な身体像 body image を持つことは心身の健全な発達に不可欠であり、幼児期にはすでに運動能力を基に身体的存在としての自己を受容していることが示唆されてきた。しかし、幼児を対象にした body image の研究に関しては、研究分野の特異性による概念の多様性と研究手法の妥当性などの問題があり、発達指標の基本となる基礎的なデータが極めて少ない。

本研究は、発達の視点から自己概念や外界を認識する際の重要な基礎となる身体像 body image について、人物描画法を基に、運動能力を構成する体格と基礎的な運動技能との関連を明らかにし、その構造について検討を行ったものである。

第1章では、研究目的を示すとともに、身体知覚 body perception、身体概念 body concept、身体意識 body awareness、身体図式 body schema などの精神医学、心理学、哲学等における多様な記述と本研究で使用する body image との関連を明らかにし、研究手法として人物描画法を用いることの有効性について文献的検討を行った。

第2章では、人物描画法である Goodenough-Harris Drawing Test (Draw-A-Man Test : DAM 法) からみた幼児の body image について横断的、縦断的な発達の特徴を調べ、人物描画の多面的かつ力動的な側面について検討を行った。DAM 法で描かれた人物画の15部位(頭、首、胴、腕、手掌、脚、足、指、髪、眉毛、目、鼻、口、耳、衣服)からの分析に基づき、被験児の年齢(4歳児・5歳児)と性別による特徴を検討した。その結果、4歳児では頭、脚、目、口の描画率は高いものの他の部位については低く、頭足人的特徴を示した。5歳児では眉毛、鼻、耳の描画率は低いが、他の

部位については4歳児よりも有意に描画率が高く、身体部位の認知が高いことが明らかになった。さらに、縦断的にみた場合、5歳児においては半年間で描画率の顕著な向上が見いだされた。一方、性差については、4歳児、5歳児とも女兒の描画率が高く、特に4歳児では髪、衣服において、5歳児では胴、手掌、髪、衣服において高いことを見いだした。

次に、DAM法の多面的な側面について検討を行った。描かれた人物画から示された身体的な動きの評定結果と運動能力とに密接な関連のあることが明らかにされた。

第3章では、幼児が自分自身の形態について知覚しているものがその幼児の人物描画に反映されることを検証するために、描かれた自己像の大きさ（縦・横・腰部の長さ、頭部・自己像の面積）と幼児の体格（身長、体重、カウプ指数）との関連性、さらに自己像とDAM法による人物画との関連性を調べた。自己像の大きさと幼児の体格との関連について重回帰分析を行った結果、自己像の全面積と頭部の面積については、性別の要因が関与し、女兒よりも体格的にも大きい男児の方が、自己像を大きく描く傾向が見いだされた。また、縦の長さについては、年齢、性別、身長、体型の要因が強く関与していることが見いだされた。これらの結果は、自己像描画によるbody imageに対する年齢と性別要因の関与はDAM法で見いだされた結果を裏付けるものであり、特に縦の長さについては、体格との関連性が示され、自己像描画法を用いて研究を進める上での指標となると考えられる。

次に、自己像描画とDAM法による人物画との関連性について調べた結果、それぞれの得点間に有意で高い正の相関が認められ、DAM法によって描かれた人物画には自己像が投影されていることが示された。

第4章では、幼児のbody imageと運動能力との関連性について検討を行った。運動技能の獲得や向上の基礎となる運動能力の発達、幼児や児童の自己概念にとって重要であるとされているが、実証的なデータは得られていない。第1節においては、運動能力と人物描画法による幼児のbody imageとの関連性について調べた。運動能力については、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、25m走の基礎的運動技能と、性格特性と関連のある体支持持続時間の4種目を取り上げた。その結果、5歳児が4歳児よりもすべての種目で有意に優れており、さらにbody image得点と4種目の合計得点（T得点）の間に有意な正の相関が認められ、運動能力の高い幼児ほどbody image得点が高く、身体部位の認知が高いことが明らかになった。第2節では、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、25m走、体支持持続時間の4種目を取り上げ、運動技能に関与する身体部位の認知と人物描画法によるbody imageとの関連性について2年間にわたり縦断的に調べた。その結果、4歳児、5歳児ともに基礎的な運動技能に関与する身体部位の描画得点と各運動技能の成績とに正の相関が見られ、比較的早期に動作に関与する身体部位を認知できることが明らかになった。さらに、このことはインタビューによる内省報告を求めた結果とも一致した。たとえば、ソフトボール投げにおいて、4歳児は四肢の部位に意識を持ち、これに対し5歳児になると安定したフォームで走るということが、速く走るために

は必要であるという経験を通した結果、上半身の関与をあげていた。

第5章では、幼児が抱く身体に対する評価的態度として「身体満足度」、「理想体型」、「身体感覚」といった3つの側面から幼児の body image の特徴について検討した。身体19部位を取り上げ身体満足度についての評定結果をもとに因子分析を行い、その構造からみた結果、顔、口、頭、体格を示す因子において男児の方が女児よりも満足度が高いことが示された。瘦身、普通、肥満を示す体型絵カードをもとに、現在の自己の体型と将来の理想体型について調べた結果、現在の自己の体型と将来の理想体型ともに、女児よりも男児の方が普通体型を選択した割合が高かった。将来の理想体型については、特に女児が男児よりも有意に痩せ体型を理想としており、青年期の女性と同じ傾向を示した。次に、身体感覚については、身体19部位を取り上げSD法により「長さ」、「大きさ」、「太さ」の3つの観点から現在と将来についての評定を求めた。長い、大きい、太いと評定された部位を Large 項目とし、短い、小さい、細いと評定された部位を Little 項目として分析した結果、Large 項目として男児では現在、将来ともに「脚」であり、Little 項目としては「腕」であった。一方、女児では Large 項目としてとらえている身体部位は、男児同様現在、将来ともに「脚」の部位であり、Little 項目としては現在は「耳」であるのに対し、将来は「指」であった。現在について評価の特徴については描画と一致しており、身体部位の大きさに関しては自己の body image の特徴を比較的客観的にとらえていることを示すものであった。

第6章では、第1章から第5章までで得られた知見をもとに、幼児の body image の構造について総合的に考察を行った。第1節では幼児の body image の定量的評価法として人物描画法である Goodenough-Harris Drawing Test (Draw-A-Man Test : DAM 法) の妥当性について、4歳児、5歳児を対象に発達的特徴から明らかにし、body image の構造について、運動能力を構成する形態的側面として体格、機能的な側面として基礎的運動技能、身体に対する評価的側面からとらえられることを示した。さらに、本結果から保育現場への適用について留意すべき具体的な観点を示した。第2節では本研究結果について6点にまとめ、第3節では残された検討課題について述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、自己概念や外界を認識する際の重要な基礎となる身体像 body image について、人物描画法を基に、発達の視点から幼児を対象としてその構造と形成過程を明らかにしたものである。

本論文の特色として、一つには、人物描画法で描かれた“人”が自己像を反映するものであることを定量的に証明したことがあげられる。これまでの研究では、人物描画法は主に心理検査や心理療法の中で、その人の内的世界にアプローチする手段として用いられ、描画に表される象徴的表現の定性的解釈に止まっていた。二つ目として、用いられた人物描画法が、幼児の場合、運動能力を構成する身体の形態的・機能的特徴を反映するものであることを縦断的に検証し、限られた年齢範囲ではあるが、身体的存在としての自己を可動的・可変的に受容していることを示す発達指標の基礎的なデータを得たことがあげられる。三つ目として、body image には身体に対する態度といった、情意的評価が反映されることを示したことである。

本論文は次の6章から構成されている。

第1章では、研究目的を示すとともに、研究分野の特異性による概念の多様性と研究手法の妥当性などの問題を指摘し、研究手法として人物描画法を用いることの有効性について文献的検討を行い、body image の操作的定義を行った。

第2章では、人物描画法である Goodenough-Harris Drawing Test (Draw-A-Man Test : DAM 法) からみた幼児の body image について横断的、縦断的な発達の特徴を調べ、人物描画の多面的かつ力動的な側面について検討を行い、人物画における年齢や性別特徴を明らかにした。この中で、特に人物画の全体像について、4歳児後半において男女児ともに描画に大きな変化がみられることを見いだしており、表象的表現の転換点の存在を示唆する上で重要な根拠を示したものといえる。

さらに、描かれた人物画から示された身体的な動きの評定結果と運動能力とに密接な関連のあることを明らかにした。運動能力といった身体をコントロールする技能の向上が、幼児の人物画に反映されることを実証的に示した貴重な結果であり、この結果が本論文のテーマともなり、以下の研究を進める根拠ともなった。

第3章では、幼児が自分自身の形態について知覚しているものが、その幼児の人物描画に反映されることを検証するために、描かれた自己像の大きさと幼児の体格に関する実測値との関連性、さらに自己像と DAM 法による人物画との関連性について検討した。自己像の大きさと幼児の体格との関連について重回帰分析を行った結果、自己像の全面積と頭部の面積については、性別の要因が関与し、女兒よりも体格的にも大きい男児の方が、自己像を大きく描く傾向が見いだされた。また、縦の長さ

については、年齢、性別、身長、体型の要因が強く関与していることが見いだされた。これらの結果は、自己像描画による body image に対する年齢と性別要因の関与は DAM 法で見いだされた結果を裏付けるものであり、特に縦の長さについては、体格との関連性が示され、自己像描画法を用いて研究を進める上での指標となることを示唆するものであった。

次に、自己像描画と DAM 法による人物画との関連性について調べた結果、それぞれの得点間に有意で高い正の相関を認め、DAM 法によって描かれた人物画には自己像が投影されていることを見いだした。

第 4 章では、幼児の body image と運動能力との関連性について検討を行った。運動技能の獲得や向上の基礎となる運動能力の発達が幼児や児童の自己概念にとって重要であるとされているが十分な実証的なデータは得られていない。第 1 節においては、基礎的運動技能を主とした運動能力と人物描画法による幼児の body image との関連性について調べ、運動能力の高い幼児ほど body image 得点が高く、身体部位の認知が高いことを明らかにした。第 2 節では、運動過程で幼児が自分の身体の動きをどのようにとらえているか、またそれが人物描画法による body image に反映されるのかについて、2 年間にわたり縦断的に調べた。その結果、4 歳児、5 歳児ともに基礎的な運動技能に関与する身体部位の描画得点と各運動技能の成績とに高い正の相関を見だし、比較的早期に動作に関与する身体部位を認知できることを明らかにした。さらに、このことをインタビューによる内省報告からも裏付けている。

第 5 章では、幼児が抱く身体に対する評価的態度として「身体満足度」、「理想体型」、「身体感覚」といった 3 つの側面から幼児の body image の特徴について検討した。身体 19 部位を取り上げ身体満足度についての評定結果をもとに因子分析を行い、その構造からみた結果、顔、口、頭、体格を示す因子において男児の方が女児よりも満足度が高いことが示された。瘦身、普通、肥満を示す体型絵カードをもとに、現在の自己の体型と将来の理想体型について調べた結果、将来の理想体型において、女児が男児よりも有意に痩せ体型を理想としており、社会文化的背景の影響を示唆するものであった。次に、身体部位をどのように感じているかといった身体感覚について力動的に把握するため現在と将来について SD 法により評定を求めた。その結果、身体感覚については性差がみられず、男女児とも自己の body image の特徴を比較的客観的にとらえていることを示すものであった。

第 6 章では、総括論議として第 1 章から第 5 章までで得られた知見を要約し、幼児の body image の構造について述べている。幼児の body image の定量的評価法として人物描画法の有効性とそこに示される 4 歳児、5 歳児を対象に発達の特徴から、body image の構造については、運動能力を構成する形態的側面として体格、機能的な側面として基礎的運動技能、身体に対する評価的側面からとらえられることの重要性を指摘している。

以上、学位申請者は幼児教育者としての経験から、目的動作を引き出す際に身体部位を強調したイ

メージの重要性に気づき、精力的に body image の研究を進めてきた。本研究の意義は冒頭に述べた点にある。本研究は、理論的な考究について不十分な点があるが、幼児期においてすでに運動能力を基に身体的存在としての自己を受容していることを示し、比較的早期の body image の特徴を明らかにしたのものとして評価できる。適切な body image を持つことは心身の健全な発達に不可欠であることから、ここでの研究結果は幼児教育における新たな提言をもたらすものであるといえる。

また、これらの知見は、本学の人間文化研究科年報、スポーツ科学研究年報の他、保健の科学、乳幼児教育学研究などの国内学会誌、国際誌 *Perceptual and Motor Skills* などに原著論文として公表されている。さらに、日本発達心理学会大会、日本乳幼児教育学会大会、日本体育学会大会などにおいても発表されており、この分野の研究者の注目を集めている。

よって、本論文は奈良女子大学博士（学術）の学位論文として十分な内容を備えていると評価できる。